

虹

継いだ銭湯に救われ

206 星空を撮る3代目



「平成松の湯」でカメラを手にする黒崎さん

小さな頃から、銭湯を継ぐのが嫌だった。両親は休みなく働き、一緒に旅行した記憶がない。田舎で暮らすコンプレックスもあった。銭湯からも、富山からも、かけ離れた世界へ行きたいと思いつけていた。だが、今は番台に座っている。

魚津市の市街地にある銭湯「平成松の湯」の3代目、黒崎宇伸さん(57)が父の後を継いで26年がたつ。入浴客は年配の常連が中心で、朝乃山や大谷翔平の話題で盛り上がり、話し声が浴場に響く。

定休日の月曜には、設備のメンテナンスをする。ポンプの修理業者に来てもらい、黒崎さんはシャワーのパッキンを直す。ふと、「親父もずっとこんなことやってたな」と思い出す。

「平成松の湯」が他の銭湯と違うのは、入り口のそばに大きな写真パネルが展示されていることだ。いずれも世界的なコンテストの入選作品。黒崎さんが仕事の終わった後や空き時間に、星空と共に観覧車や桜を撮影した写真が並ぶ。「フォトアーティスト」が黒崎さんのもう一つの肩書だ。

◇

黒崎さんは、祖父の代から続く銭湯を営む家に長男として生まれた。幼い頃の記憶に残っているのは、保育園の卒園式。白タイツに半ズボンをはくのが嫌で、自分だけ長ズボンをはいた。「カッコ悪いことに對して、ものすごく頑固だった」

家にいると銭湯の手伝いをさせられるので、晩ご飯の時間まで外に遊びに出かけた。釣りやをしたりしていた。知らない所に行きたい気持ちが強く、小学生の時に小遣いで行ける所まで1人で電車を出かけた。

お盆には、東京の大企業に勤める叔父の一家が帰省した。いとこはテレビで『8時だヨ!全員集合』を見たが、当時の富山に民放は2局しかなく、放送していない。都会との違いを感じ、劣等感を抱いた。叔父の影響で、漠然とサラリーマンになりたいと思っていた。

進学した富山高専では、クラスメートとツーリングに行くためにバイクの免許を取得し、中古を買った。バイクは自分を遠くに連れて行ってくれる手段であり、「自由になるための翼」だった。春休みには1人で九州一周の旅に出かけた。

就職したのは、事務機器やカメラを製造する大手企業だった。採用担当者に「富山

以外ならどこでもいい」と希望を伝えていたが、配属先は富山営業所。裏切られた気持ちだったが、コピー機のメンテナンスをする外回りの仕事は性に合っていた。

その頃、父親の竹治さんが銭湯を建て替えた。黒崎さんは会社員を続けながら、心の片隅に「結局、自分が銭湯を継ぎ、その借金を返さないといけないのか」という思いがあった。「両親が元気な間は、もっと自由気ままに好きなことをやりたい」

入社して2年がたった頃、書店で見つけたダイビング雑誌を開くと、海外のインストラクターの求人記が記されていた。ダイビングの経験はないが、自分が求めているものだった。会社を辞め、上京してインストラクターの資格を取得。サイパンや福井県のダイビングショップで働いた。

水中写真を撮り始め、その魅力にのめり込む。仕事を辞め、パラオ、マレーシア、



「雨宿り」西治子

エジプトなど世界各国を巡った。実家で暮らしながら、スキー場のパトロールや測量のアルバイトをして旅費をためた。

◇

2000年6月。夜中に自宅でドンと大きな音がした。銭湯ではよくあること。父が掃除をしていて、何かひっくり返ったのだと思った。それから2時間ぐらい経った後、父が倒れているのを見つけた。救急車を呼び、心肺蘇生を施したが、手遅れだった。

葬儀で喪主を務めた黒崎さんは号泣した。「音を聞いてすぐに駆けつけていたら、親父は死ななかつたんじゃないか」という悔しさと、「自分は死ぬまで、この地でがらんじがらめになる」という思いがあった。亡くなった後、親戚から、長男だった父も銭湯を継ぎたくなかつたのだと聞いた。「実は僕の気持ちも分かつていたと思う」と振

り返る。

32歳で銭湯を継ぎ、父がしていた自動車保険代理店の仕事も引き継いだ。日中は富山市内のダイビングショップでも働き、バイクにもめり込んでいった。

銭湯を継いで9年後。立山町の町道でバイクを走らせていた際にカーブで転倒し、前から来た大型ダンプのタイヤが脚に乗り上げた。右すねは開放骨折し、搬送先の病院で手術を受けた。

当初は全治3カ月と言われていたが、患部が感染症を起こしていることが分かった。手術とリハビリを繰り返し、強力な抗生物質を投与された。経過は良くなり、ゴールの見えない状態。精神状態はどん底だった。「いっそ事故の時に死んでいればよかった」とすら思った。

手術は計5回、入院生活は1年に及んだ。「父が死んで、銭湯を継いで、借金もあつ

て、そんな生活は最低だと思っていたけど、入院生活に比べたら天国。あの暮らしに戻りたい」と願った。

◇

「君の仕事はね、歩くことだ」
医師から言われた。欠損した部分の骨を再生させるために刺激が必要だという。リハビリで病院の周りの寺などを歩いて回り、写真を撮影するようになった。

銭湯の仕事しながら、新聞社の写真コンテストに毎月1点投稿することを自分に課し、被写体を探した。写真が心の暗闇に光を与えてくれるように感じた。

県内や全国の写真コンテストで受賞するようになったものの、世界的なコンテストでは評価されなかつた。「何が足りないのか」「良い写真とは何か」と自分に問いかけ、模索を繰り返した。

英グリニッジ天文台主催の天体写真コンテストで入選するようになり、昨年にはミラージュランドの観覧車と星の軌跡を捉えた作品が日本人最高位の準優勝に輝いた。

写真の腕を見込んで、企業から撮影を頼まれることもあるが、断っている。写真はなりわいにするつもりはない。

撮影する基準はシンプルで、「美しいか、カッコ悪いか」だという。「写真に写っているのは景色だけど、表現しているのは、その瞬間を『カッコいい』と思った自分の気持ち。僕自身の生き方を写している」と説明する。原点には入院生活がある。「人間は楽しいことや美しいことがないと希望が持てない。だから、人の目に触れる写真は美しくあるべき」と思う。

「本当に撮りたいものだけ撮る。それができるのは、なりわいの銭湯があるからで、僕の強みでもある。あれほど継ぐのが嫌だった銭湯に今は救われている」

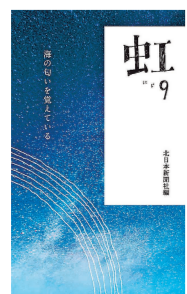
◇

午後1時の営業開始に合わせ、年配の客が次々とやって来る。「この一番風呂に入るのが極楽」と話すのは、常連の桑山東彦さん(86)＝魚津市。毎日同じ時間帯に来て、洗い場も同じ場所に座り、脱衣場のテレビで大リーグ中継を見て、ほかの常連や黒崎さんと世間話をする。「生活のサイクルに入っているんですよ。定休日に他の銭湯に行っても、よその家に行ったみたいな気持ちになる」

ただ、地域の銭湯は姿を消しつつある。黒崎さんが継いだ頃は魚津市内に15軒あったが、後継者難などで今は3軒に。「銭湯は常連さんのおかげで成り立つ職業で、その日常を崩すわけにはいかない。その思いは、『風呂屋のあんちゃん』として子どもの頃からずっと自分に染み付いている」

午後10時半に銭湯の営業が終わり、浴場の掃除が終わるのは夜も更けた午前1時。それがずっと続いてきた日課だ。「銭湯を継いだ頃よりも、今の方が断然楽しい。状況は変わらないけど、僕の考え方が変わった」。一日の仕事を終え、黒崎さんはカメラを手に出かける。

黒崎さんが写真を撮影するのは夜。銭湯の仕事があるため、時間や場所が限られる中で、何が撮れるのかを探ります。若い頃は富山を離れることを望んだ黒崎さんですが、「今いるここを憧れの場所として表現したい」と話します。



「虹」第9集 販売中

「虹」を書籍化しています。最新刊の第9集『虹 海の匂いを覚えている』は2022年9月から24年5月までに掲載した20編を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時～午後5時)。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50
北日本新聞社西部本社「虹」係
FAX 0766-25-7773
mail niji@kitanippon.jp
次回掲載は7月1日(水)です。

紙面提供/人と鉄のあいだに

OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作/北日本新聞社
メディアビジネス局